

第100回鶴見大学図書館貴重書ミニ展示

鶴見大学短期大学部
歯科衛生科主催

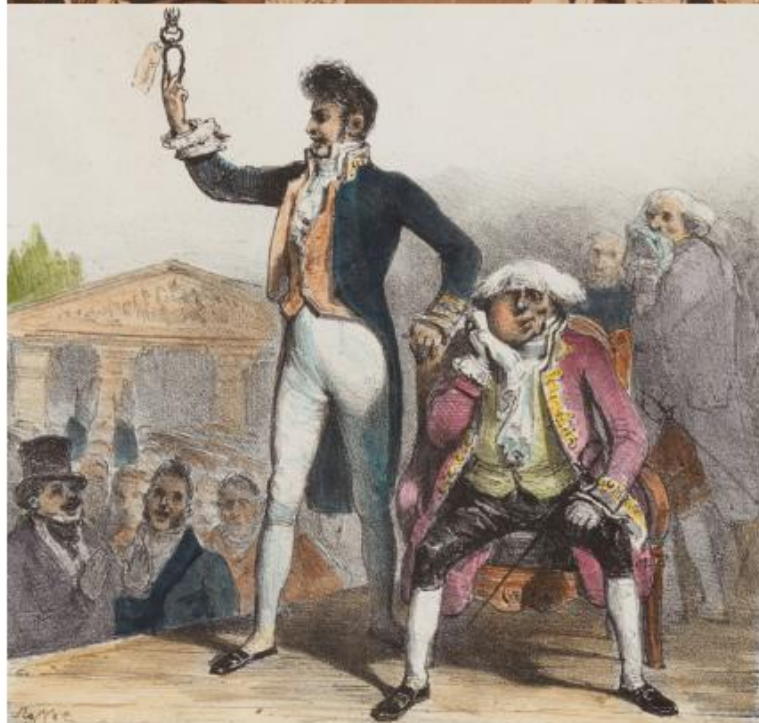
歯科と 美術

第1回

西洋美術における拔牙

2025年10月24日（金）
～11月29日（土）

鶴見大学図書館
1階エントランスホール



鶴見大学短期大学部歯科衛生科主催

歯科と美術 第1回～西洋美術における拔牙～開催に寄せて

歯科医療は、人類の歴史とともに進化してきました。古い時代の人々もまた、歯の痛みに悩み、恐れ、治そうと努力してきました。その姿は多くの美術作品にも描かれています。なかでも「拔牙」という行為は、単なる治療ではなく、痛みやおかしさ、時には社会を風刺する題材として表現されてきました。

鶴見大学と鶴見大学短期大学部では、長い年月をかけて多くの貴重書を集め、大切に保存してきました。教育や研究だけでなく、文化を未来へつなぐことも私たちの大切な使命です。本展は、その学術的な財産を活かし、短期大学部歯科衛生科が主催する新しい取り組みとして開催されます。

第1回となる今回は、「西洋美術における拔牙」をテーマに、17～19世紀のヨーロッパの絵画や版画を通して、当時の人々が“歯”や“治療”をどのように感じていたのかを紹介します。登場人物の表情や背景の描写から、医療の発展だけでなく、人々が「痛み」と「癒し」をどんなふうに関心を持っていたのかを感じ取っていただければ幸いです。

会場

歯科と美術：一見遠い二つの世界を結ぶこの展覧会が、皆さまに新たな発見と想像の楽しみをもたらすことを願っております。

展示作品一覧 List of Works

1. 僧院橋の歯抜き人

M. Benevant qui arrache si bien les dents, à la foire de Pont-l'Abbé
シャルル・ロシェール(Charles Rocher) 作

2. 初回公演、いかがでしょうか？

L'arracheur — pour la première comment la trouvez-vous ?
ドニ・オーギュスト＝マリー・ラフエ(Denis Auguste Marie Raffet, 1804-1860) 作
『ラ・カリカチュール(La Caricature, Pl.104)』別丁挿図

3. 歯を抜く人

L'arracheur de dents
ヘラルト・ドウ(Gerard Dou, 1613-1675) 作

4. 痛みの恐怖は恐怖の痛みを与える

La peur du mal donne le mal de la peur
アドルフ・ジャン＝バティスト・バヨ(Adolphe Jean-Baptiste Bayot, 1810-1866) 作

5. 町の歯抜き人

The Town Tooth Drawer
ウィリアム・ダヴィンソン(William Davison Alnwick, 1781-1858) 作

6. 田舎の歯抜き人

The Country Tooth Drawer
ロバート・ダイトン(Robert Dighton, 1752-1814) 作

7. 歯痛

The Tooth-Ache
文: ホーレス・メイヒュウ(Horace Mayhew, 1816-1872)
画: ジョージ・クルックシャンク(George Cruikshank, 1792-1878)

8. ユーモラスに描写された受難

The Passions, Humourously Delineated
ジョン・コリユー(筆名ティモシー・ボビン/John Collier, pseud. Timothy Bobbin, 1708-1786) 著

9. 外科手術 — 幻灯 第16号

La Chirurgie — La Lanterne Magique, No.16
シャム(Cham/アメデ・シャルル＝アンリ・ド・ノエ, Amédée Charles Henri de Noé, 1819-1879) 作

10. むし歯

Der hohle Zahn
ヴィルヘルム・ブッシュ(Wilhelm Busch, 1832-1908) 作
ドイツ・ミュンヘン刊『ミュンヘン一枚絵(Münchener Bilderbogen)』No.330

1. 僧院橋の歯抜き人

(*M. Benevant qui arrache si bien les dents, à la foire de Pont-l'Abbé*)

シャルル・ロシェール(Charles Rocher)作

パリ 1930 年頃(原画:1925 年) リトグラフ 34.8×27.4cm

本作品は、フランスの画家シャルル・ロシェール(Charles Rocher, 1890–1962)によるリトグラフであり、1930 年頃に制作されたとされる。原画は 1925 年に描かれたもので、フランス西部ブルターニュ地方の町ポン＝ラベ(Pont-l'Abbé)における市(foire)を舞台としている。

画面には、「M. Benevant qui arrache si bien les dents, à la foire de Pont-l'Abbé(ポン・ラベの市で歯をととても上手に抜くベネヴァン氏)」というキャプションが添えられており、当時の大道芸的な歯科医療の様子がユーモラスかつ風刺的に描かれている。ベネヴァン氏は実在の人物か否かは定かではないが、こうした市では理髪師や行商人が歯を抜くこともあり、医療と見世物が混在していた時代背景を反映している。

ロシェールは、地方の宗教施設や公共建築の装飾を手がけた画家であり、庶民の生活や信仰、風俗を題材とした作品を多く残している。彼のリトグラフは、細密な描写と柔らかな線によって、対象の滑稽さと人間味を巧みに表現しており、本作もその例に漏れない。

ポン・ラベは、12 世紀に修道院長によって建設された橋を中心に発展した町であり、「僧院橋(Pont de l'Abbé)」という地名はその由来を示している。ブルターニュ地方の文化的中心地として知られ、刺繍や民族衣装の伝統が今も息づいている。市(foire)は、こうした文化の交流の場であり、医療・芸能・商業が交錯する空間でもあった。

2. 初回公演、いかがでしょうか？

(*L'arracheur — pour la première comment la trouvez-vous ?*)

Les spectateurs — Bravo ! Courage ! Continuez.)

日本語訳 抜歯師:「(抜歯の)初回公演、いかがでしょうか？」

観客たち:「ブラボー！ 頑張って！ もっと続けて！」

ドニ・オーギュスト＝マリー・ラフェ(Denis Auguste Marie Raffet, 1804–1860)作

パリ 19 世紀前期 彩色リトグラフ 22.2×19.8cm

『ラ・カリカチュール』(La Caricature, Pl. 104)別丁挿図 104

歯に結びつけられた紙片には“Hérédité(世襲)”と記されており、旧王政時代の貴族社会を象徴する語として、時代遅れの特権階級を痛烈に嘲笑している。民衆の喝采を浴びる「歯抜き師」は、世襲的支配を引き抜く革命の寓意であり、観客の無邪気な賛辞とともに、政治風刺としての痛快さと皮肉が際立つ。

19 世紀フランスの版画家ドニ・オーギュスト＝マリー・ラフェは、エコール・デ・ボザールで歴史画家グロに学び、鋭い観察眼と繊細な線描を持つ芸術家として知られた。初期には風刺誌『ラ・カリカチュール』や『ル・シャリヴァリ』に数多くのリトグラフを寄稿し、ユーモアと社会批判を融合させた作品を発表した。のちにナポレオン戦争を題材とする軍事画で名声を確立し、勇壮な戦場の情景を生き生きと描いたことから「版画のドラクロワ」と称された。彼の作品には詩情と写真が共存し、1837 年のサロンでメダルを受賞。ヨーロッパ各地で高い評価を受けた。晩年はイタリアに滞在し、1860 年ジェノヴァで没した。風刺と英雄主義を併せ持つラフェの作風は、19 世紀フランス版画家の成熟を象徴している。

『ラ・カリカチュール(La Caricature)』は 1830 年、シャルル・フィリポンによって創刊された風刺週刊誌で、正式名称は『ラ・カリカチュール・モラル、レジューズ、リテール・エ・スセニック』。

政治・宗教・社会を風刺する内容で人気を博し、画家オノレ・ドーミエやグランヴィル、トラヴィエ、ラフェらが挿絵を担当した。若き日の文豪バルザックも執筆陣に名を連ね、創刊趣意書を執筆している。誌面ではルイ＝フィリップ王政への批判が繰り返され、検閲や訴追が相次いだ。1835年の九月法で一時廃刊となるが、1838年に『ラ・カリカチュール・プロヴィンソワール』として再刊。権威と偽善を笑いで撃つ同誌は、19世紀フランスにおける表現の自由の象徴であり、近代風刺画の発展に大きな足跡を残した。

3. 歯を抜く人

(L'arracheur de dents)

ヘラルト・ドウ (Gerard Dou, 1613–1675) 作

パリ 1842年頃(原画:17世紀) 銅版画 31.3×26.2cm

本作品に描かれているのは、歯科医が患者の歯を抜く瞬間である。患者の苦痛に満ちた表情と、歯科医師の真剣な眼差しが、当時の医療行為の厳しさと人間の営みのリアルさを物語っている。背景には棚や瓶、家具などが細かく描かれており、画面全体に漂う静謐な空気が、ドウの画風を象徴している。

17世紀のヨーロッパでは、歯科治療は専門性が確立されておらず、理髪師や行商人が歯を抜くことも珍しくなかった。本作品は、そうした時代背景を踏まえつつ、医療行為を一種の社会的イベントとして捉えた視点を提供している。ドウは、単なる写実にとどまらず、人間の感情や関係性をも繊細に描き出している。従って本作品は、単なる医療の記録ではなく、17世紀の人々の生活、苦悩を芸術の力を通じて浮き彫りにしている。

また、画面左下に記された「Gerard Dou pinx.」という署名は、ラテン語で「描いた人」を意味し、画家自身の誇りと作品への責任を示している。「A Paris chez Jean」という表記は、パリの版元ジャンによってこの作品が版画として出版されたことを示しており、当時の美術作品の流通形態を知る手がかりともなる。

4. 痛みの恐怖は恐怖の痛みを与える

(La peur du mal donne le mal de la peur)

アドルフ・ジャンバティスト・バヨ (Adolphe Jean-Baptiste Bayot 1810-1866) 作

パリ 19世紀 彩色リトグラフ 15.1×12.2cm

本作品は、19世紀フランスの画家・版画家であるアドルフ・ジャンバティスト・バヨ (Adolphe Jean-Baptiste Bayot 1810-1866) による彩色リトグラフである。タイトルは、痛みを恐れる心が、恐怖そのものを新たな苦痛として生み出すという逆説的な心理を表現しており、当時の風刺画に見られる哲学的な含意を持つ。バヨは、建築物や都市風景の版画で知られる一方、風俗画や寓意的な作品も手がけており、本作は後者に属する。画面には、歯科治療を受ける人物が描かれており、治療そのものよりも、治療を前にした「恐怖」が強調されている。表情や身振り、周囲の構成要素が、痛みの実体よりも「予期される痛み」によって生じる苦悩を視覚化している。

当時の市民は、医療技術の未熟さや治療への不信感から、治療そのものよりも「それに伴う恐怖」に苦しむことが多かった。バヨはその心理的構造を巧みに捉え、視覚的に表現することで、鑑賞者に人間の内面への鋭い洞察を促しているとも考えられる。したがって、本作品は、単なる風俗画ではなく、人間の感情の複雑さを描いた心理的寓意画ともいえよう。

リトグラフは、当時もっとも身近な印刷メディアとして市民に広く流通し、風刺や社会批評を伝える重要な手段であった。その軽やかな線描と柔らかな階調は、恐怖と理性の「あわい」に揺れる人間の姿を生々しく浮かび上がらせる。

5. 町の歯抜き人

(The Town Tooth Drawer printed and published by W. Davison Alnwick)

ウィリアム・ダヴィソン (William Davison Alnwick 1781–1858)

1810 年代 彩色銅版画 30.0×22.0cm

本作品は、19 世紀イギリス北部ノーサンバーランド州アルンウィックを拠点とした出版人ウィリアム・ダヴィソンによる彩色銅版画である。ダヴィソンは薬剤師・書店主・文具商・印刷業者・出版社を兼ね、地方都市における出版文化の発展に大きく寄与した人物であった。もともと薬局を営んでいた彼は、1804 年に書籍や紙、画材などの販売を始め、やがて出版業へと活動を拡大していった。1807～1808 年には印刷業者ジョン・キャトナッチと短期間の共同事業を行い、その後独立。1810 年代にはステレオタイプ版(鑄造活字版)印刷を導入し、1814 年には自ら鑄造所を設立するなど、地方では珍しい近代的な印刷体制を整えていた。

1812～1817 年ごろには、社会風刺や風俗画をテーマにした単枚の版画(caricatures)シリーズを発行しており、医療や商業、日常生活を皮肉る作品群を制作した。本作〈町の歯抜き人〉もその一つである。室内で歯を抜かれる婦人と、得意げな「歯抜き人」、驚く女性、瓶を持つ黒人少年、床を歩く猫といった登場人物が、当時の庶民的な生活感と滑稽味を豊かに伝えている。痛みを伴う抜歯の光景をどこか芝居のように演出し、医療行為が娯楽や見世物の一部でもあった時代の空気を風刺的に描き出している。

その後ダヴィソンは、児童書や教科書、地元アルンウィックの案内書など幅広い出版物を手がけ、1830 年代には新聞『Alnwick Mercury』(のちの『Northumberland Gazette』)を創刊。庶民教育と地方報道の推進に尽力した。薬剤師でありながら印刷と出版の両分野で成功を収めた彼は、フランス革命後の啓蒙と産業化の時代に生きた、地方文化の実践者であり、庶民の知的生活を支えた象徴的な人物である。

6. 田舎の歯抜き人

(The Country Tooth Drawer)

ロバート・ダイトン (Robert Dighton, 1752-1814) 作

ロンドン 1784 年 銅版画 44.5×53.5cm

本作品は、ロバート・ダイトン (Robert Dighton, 1752–1814) による銅版画で、1784 年に出版された。画面では、田舎の鍛冶屋のような男が女性の歯を力任せに抜こうとし、助手が頭を押さえ、子どもが泣き叫ぶ様子が描かれている。炉の火が燃える作業場と散らばる道具類は、医療と手仕事の境界が曖昧だった時代を象徴している。ダイトンは当時のロンドンで人気を博した風刺画家であり、町の人々、軍人、俳優、政治家などを滑稽に描いた諷刺肖像で知られる。彼の描く登場人物は、どこか劇的で、世俗のエネルギーに満ちている。本作も、痛みと笑いが共存する「田舎の抜歯」を通じて、人間の滑稽さと時代の野趣を描き出している。

ロバート・ダイトンは、イギリスの肖像画家・風刺画家・エッチング作家。自らを“drawing-master (絵画教師)”と称し、手彩色銅版画による風刺肖像で知られた。ロンドンの劇場周辺や酒場に集う人々、軍人、俳優などを生き生きと描き、18 世紀末から 19 世紀初頭にかけて人気を博した。彼の作品は、当時の社会風俗をユーモラスかつ批判的に切り取る視点で高く評価されている。また、ダイトンの息子たちデニス・ダイトンやロバート・ジュニアも画家として活動し、一家で風刺画制作を行った。彼らの活動は、18～19 世紀における英国風刺画の一系譜を形成し、社会批評と娯楽が融合した文化の成熟を示している。

7. 歯痛

(The Tooth-Ache)

ホーレス・メイヒュウ (Horace Mayhew, 1816–1872) 著

ジョージ・クルックシャンク (George Cruikshank, 1792–1878) 画

ロンドン 1849 年頃刊 パノラマ本(彩色銅版画) 全 43 図 13.0cm

本作品は、ヴィクトリア朝イギリスにおける風刺出版文化の成熟を象徴する一冊である。作家ホーレス・メイヒュウが構想し、挿絵画家ジョージ・クルックシャンクが図像化したこのパノラマ形式の風刺本は、歯痛に苦しむ男の発症から抜歯、そして快癒に至るまでの顛末を、43 場面にわたる彩色銅版画でユーモラスに描いている。蛇腹状に折りたたまれたページを展開する形式は、当時流行していた「パノラマブック」の技術と風刺文学の精神を融合させたものといえる。

ホーレス・メイヒュウは、風刺週刊誌『パンチ (Punch)』の初期寄稿者で、軽妙なユーモアと庶民の日常観察を得意とした作家である。彼の家族は文学一家で、兄ヘンリー・メイヒュウ (Henry Mayhew, 1812–1887) は社会調査書『ロンドン・ラバーズ (London Labour and the London Poor)』の著者として知られ、弟オーガスタス (Augustus Mayhew, 1826–1875) も小説家として活動した。三兄弟はいずれも『パンチ』誌で活躍し、社会風刺とユーモアを融合させたヴィクトリア朝風刺文学の基盤を築いた。ホーレスにとって〈The Tooth-Ache〉は、日常の痛みを人間の滑稽さに転化する手法を確立した作品であり、風刺作家としての真価を示すものとなった。

挿絵を担当したジョージ・クルックシャンクは、19 世紀イギリスを代表する風刺画家で、父アイザック・クルックシャンクの後を継ぎ、ロンドンの版画界にその名を知られた。初期には政治風刺や反ナポレオン版画で人気を博し、やがて社会批評と挿絵芸術に転じていく。

彼は文豪チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812–1870) と親交を結び、ディケンズ初期の代表作『スケッチ集 (Sketches by Boz, 1836)』や『オリヴァー・ツイスト (Oliver Twist, 1838)』などの挿絵を手がけた。両者はともにロンドンの貧困や不平等を告発し、笑いと涙を通じて社会改革を訴えるという理念を共有していた。しかし、1840 年代半ば以降、禁酒運動 (Temperance Movement) をめぐる思想の違いから次第に対立し、最終的には決裂する。クルックシャンクが道徳的理想主義へと傾いたのに対し、ディケンズはより人間の複雑さを描こうとしたためである。とはいえ、両者が築いた「挿絵と文学の協働による社会批評」という枠組みは、19 世紀イギリスの文化史に深い足跡を残した。

歯痛 (The Tooth-Ache) では、そうしたクルックシャンク特有の線描と表情表現が生き生きと發揮されている。歯痛に苦しむ男の絶望的な表情、周囲の滑稽な混乱、そして治癒後の安堵にいたるまで、ユーモアの中に痛みと救済が同居している。歯痛という日常的な主題を通して、メイヒュウは「小さな苦痛に宿る人間の愚かさ」を語り、クルックシャンクはそれを「笑いを伴う社会批判」へと昇華した。本作は、ヴィクトリア朝市民社会における風刺芸術の到達点であり、「痛み」と「笑い」という普遍的な人間ドラマを、文学と版画の融合によって表現した傑作である。

8. ユーモラスに描写された受難

(The passions, humourously delineated)

ジョン・コリュー (筆名ティモシー・ボビン) (John Collier, 1708–1786, pseud. Timothy Bobbin) 著

ロンドン 1810 年頃 25 図 27cm 彩色銅版画

本作品は、詩人・画家ジョン・コリューが「ティモシー・ボビン」の筆名で刊行した風刺画集『The Passions, Humourously Delineated (ユーモラスに描写された受難)』の一部である。初版は 1770 年代に制作され、1810 年頃に再版されたこの版では、25 図を抜粋して彩色銅版として刊行された。

タイトルに冠された「The Passions」は、単なる「情熱」や「感情」ではなく、キリスト教における「The Passion of Christ(キリストの受難)」を想起させる語である。磔刑に至るまでの苦悶と犠牲を象徴するこの言葉を、コリューはあえて風刺画の題名に用いることで、人間の感情の滑稽さと痛みの普遍性を重ね合わせている。キリストの受難が神聖な救済の物語であるならば、コリューの描く「受難」は、庶民の日常に潜む滑稽でありながらも切実な苦しみ物語である。

収録作品には「鋭い痛み(Acute Pain)」「笑いの実験(Laughter & Experiment)」「同情(Fellow Feeling)」「歓楽と苦悩(Mirth & Anguish)」など、人間の多様な感情が風刺的に描かれている。中でも拔牙の場面は、身体的苦痛とその表情の誇張を通じて、観る者に痛みへの共感と笑いを同時に喚起する。これは、キリストの受難が人々の罪を背負う苦しみであるように、庶民の「受難」もまた社会の構造や人間関係の中で生じる避けがたい痛みであることを示唆している。

コリューはもともと宗教画や風景画を描く正統派画家として出発したが、次第に社会の偽善や人間の愚かしさに目を向け、風刺とユーモアを融合させた作風へと転じた。彼の作品には農民、僧侶、弁護士、政治家など、あらゆる階層の人々が登場し、表面上の体面や職業の威信の裏に隠された本音や欲望があらわにされている。

18 世紀後半のイギリスでは、医術と見世物の境界があいまいであり、拔牙や外科的処置はしばしば公開の場で行われ、観客の笑いと言驚きを誘った。コリューの描く歯科場面は、そうした時代背景を踏まえつつ、「痛み」と「笑い」という人間の両極的な感情を対比させる意図をもっている。これは、キリスト教美術における「受難」の表現が、苦悶の中に神聖さを見出すように、庶民の苦しみの中にも人間性の真実を見出そうとする試みである。

コリューの作品は後に、ジェームズ・ギルレイやジョージ・クルックシャンクらの風刺画家にも影響を与えたとされる。彼の描いた「歯痛の人間喜劇」は、単なる滑稽画ではなく、人間の感情を写し取る初期の心理的風刺画として評価されている。〈The Passions〉の拔牙図は、痛みの表情と笑いの表情が表裏一体であることを可視化し、後の時代の「歯科風刺画」の原型となったともいえる。

9. 外科手術 — 幻灯 16

(La chirurgie — La lanterne magique, No.16)

シャム(Cham)/本名アメデ・シャルル・アンリ・ド・ノエ(Amédée Charles Henri de Noé, psued. Cham, 1819–1879) 作

パリ 1850 年頃 彩色リトグラフ 『ラ・ランテルヌ・マジク』第 16 号 22.6×30.9cm

「ラ・ランテルヌ・マジク(La Lanterne Magique)」とは、17～19 世紀に広く用いられた初期の映写装置“幻灯機”の名称である。ガラス板に描かれた絵を光で投影し、壁に映して見せる仕掛けで、当時のヨーロッパでは娯楽や教育、さらには風刺的プレゼンテーションにも用いられた。シャムはこの語を比喩的に転用し、「社会の現実を光の下に拡大して映し出す」風刺的レンズとして用いている。本シリーズは、さまざまな職業や日常風景をユーモラスに照らし出し、市民の強い関心を集めた。

〈La Chirurgie(外科手術)〉では、患者の歯を乱暴に抜く外科医の姿が描かれる。19 世紀前半のフランスでは、歯科がまだ独立した専門分野ではなく、理髪師や外科医が麻酔もないまま拔牙を行っていた。シャムは、その荒々しい医療の現場を誇張された表情と動作で滑稽に描き、人間の痛みと文明の未熟さを同時に風刺している。

対照的に、〈La Médecine(医学)〉では、母親が病児に薬を与える穏やかな場面が描かれ、家庭的な看護と医療の対比が浮かび上がる。また〈La Comète écrivant son rapport sur Mr Arago(彗星がアラゴ氏についての報告書を書いている)〉は、天文学者で政治家のフランソワ・アラゴ(François Arago, 1786–1853)を皮肉った一枚である。アラゴは光の波動説を支持し、フランス科学アカデミーを率いたが、共和主義的立場から保守層の反発を受けていた。シャムはこの作品

で、科学的合理主義と社会的理想主義が交錯する時代の精神を機知に富んだ風刺で表現している。右下の〈Le père Adam faisant des croquis de paysage dans le paradis terrestre (アダム父さんがエデンの園で風景スケッチをしている)〉では、旧約聖書のアダムを“最初の画家”として描き、創造の喜びと人間の滑稽さを軽妙に重ね合わせている。これら四つの図はいずれも独立した題材を持ちながら、“幻灯”という共通のモチーフのもとに、人間社会の愚かしさ・無邪気さ・知的探求心を「投影」して見せている。

作者のシャムは、本名をアメデ・シャルル・アンリ・ド・ノエ (Amédée Charles Henri de Noé) といひ、フランスの名門貴族ノエ伯爵家の出身である。若くして絵画を志し、風刺誌『ル・シャリヴァリ (Le Charivari)』で活躍。社会風俗や政治を軽妙に風刺した作品は、同時代のドーミエと並び称された。彼のペンネーム “Cham (シャム)” は、旧約聖書のノアの息子ハム (フランス語で Cham) に由来するもので、“de Noé (ノアの家)” の末裔＝ノアの息子という、貴族的ユーモアの効いた自己言及的な洒落である。

彼の風刺は、血筋ゆえの教養と距離感、そして時代への鋭い観察が融合したものだった。《La Lanterne Magique (幻灯)》に描かれた「歯の治療」の場面にも、科学と迷信、理性と痛み、そして笑いと悲哀が同居する人間劇が映し出されている。“幻灯”の光に照らされるこの風刺画は、19世紀フランスの社会・医療・芸術を貫く人間的ユーモアと知性を、今に伝えている。

10. むし歯

(Der hohle Zahn)

ヴィルヘルム・ブッシュ (Wilhelm Busch, 1832–1908) 作

ドイツ・ミュンヘン刊『ミュンヘン一枚絵 (Münchener Bilderbogen)』No. 330

初版 1860 年頃 彩色木版画 44.5×34.5cm

本作品は、ドイツの画家・詩人・風刺家ヴィルヘルム・ブッシュによる絵物語《Der hohle Zahn (むし歯)》である。ブッシュは近代漫画(コミック)やアニメーションの先駆者として知られ、その創作は後の《マックスとモーリッツ》をはじめ、20 世紀の漫画文化に大きな影響を与えた。

ブッシュ自身は、幼少期にプロテスタント(ルター派)の牧師である叔父に引き取られ、牧師館で育ったが、生涯にわたってブッシュの精神世界に影響を残した。日々の暮らしの中で聖書と向き合いながら、人間の愚かしさや道徳的葛藤を身近に観察した彼は、のちにそれを風刺とユーモアの言葉に変えていく。彼の作品に通底するのは、ルター派的な倫理観と懐疑一すなわち、善悪を峻別しながらも、完全な正義や理想を信じきれない冷静な人間観である。

『ミュンヘン一枚絵 (Münchener Bilderbogen)』は、1848 年から 1898 年にかけて刊行された大衆向け風刺版画シリーズで、全体で約 1,200 点ある。家庭や学校での娯楽・教育として広く親しまれ、文学・風俗・風刺・科学など多様な主題を扱った。その中で《Der hohle Zahn》は、数少ない「医療・歯科」を題材とする作品である。

物語は、歯痛に苦しむ男がさまざまな民間療法を試すも効果がなく、最後に歯科医に抜歯されるまでの顛末を 16 のコマで描く。熱湯、酒、安静、いずれも効果がなく、ついに赤いフェズ帽をかぶった歯科医師が登場する。恐怖に顔をしかめる患者、容赦なく抜歯器を差し込む歯科医師。激しい抵抗ののち、歯が抜け、最後のコマでは男が晴れやかに食事をとる姿で幕を閉じる。19 世紀ヨーロッパでは、麻酔や衛生の知識がまだ発展途上であり、抜歯は「恐怖と勇気の儀式」であった。

ブッシュはその痛みをユーモアへと昇華し、観る者に“痛みを笑いに変える力”を与えている。痛みと笑いが交錯するこの展開こそ、ブッシュの真骨頂であり、このリズムカルな詩文と連続した絵画が一体となり、物語が軽快に進行する。韻文が登場人物の心理や社会風刺を語り、絵の動きとセリフのテンポが融合して、のちの漫画に通じる“コマ割り”の原型を形成、本作品は、風刺・

医学・漫画の交差点ともいえる作品である。

現在、ドイツ北部の都市ハノーファーには、彼の名を冠したヴィルヘルム・ブッシュ美術館 (Wilhelm Busch Museum, Deutsches Museum für Karikatur und Zeichenkunst) が設立されている。美しいゲオルゲンガルテン (Georgengarten) 内の歴史的建築「ゲオルゲンパライス」に位置し、ブッシュの原画をはじめ、ヨーロッパの風刺画・漫画・イラストレーションを体系的に収蔵・展示する。彼の作品が“笑いと倫理の「あわい」にある芸術”として、今に語り継がれている。



ヴィルヘルム・ブッシュ美術館 (ホームページより引用)

コラム①

ヨーロッパ風刺画に見る〈歯抜き人〉モチーフ

—— 医療と見世物のあいだにあった「歯抜き」という行為 ——

18～19 世紀のヨーロッパでは、「歯抜き人 (tooth drawer / arracheur de dents)」が庶民の生活や風刺画の格好の題材となった。歯痛は人々にとって切実な苦しみである一方、当時の歯科医療はまだ職業として確立しておらず、街頭や市に現れる抜歯師たちは、半ば見世物的な存在でもあった。彼らは音楽や道化、演説を交えながら抜歯を披露し、痛みと笑いが入り混じる奇妙な娯楽として人々の目を引いた。

ドニ・オーギュスト＝マリー・ラフェによる〈抜歯師〉(1830 年代、仏『ラ・カリカチュール』掲載)は、こうした光景を政治的風刺へと昇華した作品である。貴族の歯に結びつけられた紙片“*hérédité* (世襲)”は旧体制そのものを抜き取る象徴であり、民衆の喝采は社会変革への寓意として描かれている。歯抜きという肉体的な痛みが、王政批判という政治的痛みと重ねられている点に、フランス風刺の巧みさがある。

一方、イギリス北部の出版人ウィリアム・ダヴィソンによる〈町の歯抜き人〉(19 世紀前期)は、より日常的・庶民的な視点から描かれている。室内で女性の歯を抜く町医者、心配げに見守る人々、猫までもが登場し、イギリスの風刺特有のユーモアと温かみを感じさせる。ここでは社会批判よりも、日常生活の中に潜む滑稽さや人間味が主題となっている。

この二つの「歯抜き人」像は、同時代におけるフランスとイギリスの風刺精神の違いをよく示している。フランスが権力や制度を嘲笑の対象としたのに対し、イギリスは人間の性(さが)や暮らしの可笑しさに目を向けた。

いずれも“歯を抜く”という原始的な行為を通じて、人間社会の痛みと滑稽さを映し出した、ヨーロッパ近代の風刺芸術を象徴する主題である。

都市と田舎の〈歯抜き人〉

—— 文明と素朴のはざままで描かれた、人間の痛みと笑い ——

18～19 世紀のヨーロッパでは、歯の治療はまだ専門医の領域に定まらず、街角や市井で「歯抜き人(tooth drawer)」が見世物的に抜歯を行う光景が多く見られた。その様子はしばしば風刺画の題材となり、人間の痛みと滑稽さが同時に描かれている。

〈町の歯抜き人(The Town Tooth Drawer)〉(ウィリアム・ダヴィソン作)は、イギリス北部アルンウィックで出版された版画で、比較的穏やかな室内風景の中で、婦人の歯を抜く場面がユーモラスに表現されている。薬剤師・印刷業者であったダヴィソンらしく、清潔で教育的な雰囲気が漂い、地方出版物の親しみやすさと道徳的風刺が感じられる。観客の微笑や猫の存在など、どこか牧歌的なユーモアが特徴的である。

一方、〈田舎の歯抜き人(The Country Tooth Drawer)〉(ロバート・ダイトン作)は、より激しい表情と動きに満ちた劇的な構図をとる。1784 年にロンドンで発表されたこの銅版画では、鍛冶屋のような男が女性の歯を力任せに抜こうとし、炉の炎が燃え上がる背景や散乱する道具類が、粗野な田舎医術の混沌を象徴している。痛みの叫び、押さえつける助手、泣き叫ぶ子ども — ここでは「医療」というよりも「力業としての抜歯」が描かれている。

都市の歯抜き人が理性と秩序の象徴であるなら、田舎の歯抜き人は本能と混沌の象徴である。どちらも「痛み」をめぐる人間喜劇を描きながら、文明と素朴、教育と迷信の対立を浮かび上がらせている。こうした対照の中に、18～19 世紀ヨーロッパが抱えた“医療の過渡期”の姿が、風刺と笑いを通して見えてくる。